

もつ確率的最適化問題に導入してはじめて本来の確率的問題との相違が浮き彫りにされ、同時に意思決定者の情報利用可能時点に応じての確率的問題の確定的縮約になっている。

本論文で2種類の条件付き決定過程の導入することによって、本来の「非加法型」確率的決定問題との相違点が「最適化問題」としても「再帰式」としても明確になり、同時に確定的動的計画問題に縮約する新しい方法を提供したことになる。

AHPの固有ベクトル法に対する論理的解釈

関谷 和之, 八巻 直一 (静岡大学)

AHPでの重要度ベクトルは一対比較行列の主固有

ベクトルを求めること(固有ベクトル法)によって与えられるが、その妥当性についてはSaatyを中心に主固有ベクトルを求める手順から検討されている。

本論文では、数理計画問題として定式化することで主固有ベクトルの意味付けを試みる。まず、非負行列に対するFrobenius定理に着目して、主固有ベクトルを見出すことはminmax分数計画問題を解くことに一致することを指摘する。さらに、この主固有ベクトルは1つの均衡点問題と2つのばらつき最小化問題の最適解であることを示す。

これらの結果から、Frobenius定理がAHP(ANPも含む)の基本定理であることと、重要度ベクトルに対する数理計画モデルが作成可能であることがわかる。

(追悼文)

さようなら 平本 巖 フェロー

3月17日、あの愛知学泉大学の平本先生が逝った。周りの人々への思い豊かで穏やかな笑顔に二度と接することができなくなってしまったのか。8年前に癒えた病の再発であったと聞く。3年前、「もう5年経ったから一安心」と名古屋の小割烹で語っていたのだが……。

ORマインドを電算機によって結実しようと汗してきた先駆者の一人であった。今回も、必ずしも数学を得手としない学生のために「数式によらない最適計画法の入門書」を構想されており、これに着手したのが今回入院した昨年11月半ばであった。4か月間に及ぶ執筆への挑戦には、鬼気迫るものがある。この状況をOR学会会員であり、朝日大学の同僚である栗原和夫先生はこう語っている。「著作の

協力を求められて、何度か打ち合わせに参りました。病室にノートパソコンとプリンタを持ち込み、驚くほどのスピードで執筆され、体に障りはしないかとハラハラするほどでした。年が明けると、草稿は130頁に膨らんでいました。その草稿の余白に“だいふ読み物になってきたようだ”との書き込みがあったのが印象的です。」

病室に残されたパソコンのファイルには亡くなる前日の3月16日23時32分のタイムスタンプがあったという。息を引き取る6時間前迄、本の完成、周囲の人々や次世代へのメッセージの取り纏めに向けて全生命を賭していた。合掌。(忍田 和良)
(遺稿)「文科系の線形計画法入門」平本 巖, 栗原 和夫 共著, 牧野書店, 1999年11月出版予定